

予防鍼灸研究会 (SGPAM)

第 8 回定例会抄録

テーマ：東西医学の融合

2022年1月23日

目次

パーキンソン病の今後の栄養療法のあり方について	山口美佐	2
パーキンソン病を背景に精神症状をきたした一症例	岩崎真樹	3
便秘改善の腹部マッサージ実践	中盛祐貴子	4
「未病・養生考」	金井友佑	5
Disease-modifying therapy (DMT)の概念と実際	藤井浩司	6

一般講演

パーキンソン病の今後の栄養療法のあり方について

管理栄養士 山口美佐

パーキンソン病を背景に精神症状をきたした一症例

岩崎真樹 1) 2)、湯浅龍彦 2)

1)木更津杏林堂、2) 鎌ヶ谷総合病院脳神経内科

「抄録」 背景と目的: 呼気鍛錬リモートクラスに、東南アジア在住のパーキンソン病 (PD) の方が参加されている。その方が、不安とパニック障害を呈した。コロナパンデミックの中で、如何に対応したか経過を報告する。

症例: PD 罹患歴 3 年 60 代女性。オフ時間が長くなり、夜中は気持ちが悪くて必ず目が覚める。

対応と経過: リモート面談 (1) スマホで撮影した動画を幾つか見せて頂き、リモート面談。2 ヶ月後、日本に一時帰国。当初は快適。しかし寒気が募ると便秘、不眠、ジストニアが出現。やがて薬が切れると苦しくなるなどのパニック障害が始まる。

リモート面談 (2) パニック発作に対して、呼気を意識した腹式呼吸を指導した。東洋医学的には「上逆」、肝虚寒証=肝が虚して冷えの状態と判断して、酸味のある梅干しを食べてもらって軽快した。

考察: パニック障害は、西洋医学的には、突然生じる不安、恐怖発作で、制御困難な精神状態、様々な身体症状を伴う症候である。肝虚寒証との判断にて、肝の働きを促進して精神の緊張を和らげることに傾注した。

まとめ: 呼気鍛錬をリモートで対応していた海外在住の PD 患者が、一時帰国時に、パニック障害を来した。肝虚寒証と考え対応し、加えて専門医の助言を協力的に得られたことが症状軽快に貢献した。

(文字数 534 字)

実践講座

便秘改善の腹部マッサージ実践

祐泉指圧治療院 中盛祐貴子

「未病・養生考」

木更津杏林堂 金井友佑

「抄録」 目的：未病と養生についての考察。

対象と方法：インターネットによる文献調査。

結果：養生思想が日本に根付いたのは貝原益軒(1630-1714年)が1713年に書いた江戸時代のベストセラー養生指南書である「養生訓」からだと考えられる。「病気になる内欲(過剰の食欲、色欲等)を抑え、外邪(寒さ、暑さ等)を防ぐように心がけること。」が重要だとした。

古典における未病は、『黄帝内経・素問・四氣調神大論篇』の「聖人不治已病、治未病。」や、『千金要方・卷二十七』の「上医医未病」のように、発病前の予防的な治療の意味。もう1つは『難経七十七難』に記載の『所謂治未病者、見肝之病則知肝当伝之与脾。故先实其脾氣、無令得受肝之邪。故日治未病焉。』のように、早期の治療を行う事で病を予防するという意味で使われている。

現代における未病は1994年第1回東京未病研究会(現・日本未病学会)開催が未病への組織的な取り組みの始まりと思われ、その後、1997年「厚生白書」に未病の定義が記載。2011年、神奈川県黒岩知事就任あいさつにて「いのちプロジェクト」の立ち上げを示唆し、それ以降未病を前面に押し出した健康政策を実施している。2020年、「未病」の定義が盛り込まれた国の第2期「健康・医療戦略」が閣議決定。国の戦略にも「未病」が位置づけられる。

結論：東洋医学の発想を用いた鍼灸は、治療でありながら未病治や養生を含有するものである。

Disease-modifying therapy (DMT)の概念と実際

徳島大学病院 脳神経内科 藤井浩司

「抄録」 Disease-modifying therapy(DMT)は疾患修飾療法、つまり「疾患」を「修飾」する治療である。わかりやすく言えば、病気の経過を変えて健常に近づける治療である。再発予防や進行抑制が目的で、通常は慢性疾患に対する治療である。薬のことは disease-modifying drug (DMD, 疾患修飾薬)と呼ぶ。DMT は通常、疾患の病態機序を踏まえて、それをターゲットにして開発される。したがって、病態機序の理解が必要となる。

DMT が用いられる疾患の例として多発性硬化症(multiple sclerosis: MS)がある。MSでは神経線維を絶縁するミエリン(髄鞘)が壊される。神経系の情報は電気信号でやりとりされるが、ミエリンが壊されると(脱髄)、その部分の信号が上手く伝わらなくなり様々な神経症状が出る。ミエリンを壊しているのは自分の免疫である。このように免疫系に異常が起こり自分の体の組織を外敵と見なし攻撃してしまう病気を「自己免疫疾患」という。MSでは遺伝因子と環境因子の相互作用が関与する。環境因子(ビタミンD、喫煙など)はコントロールしうるもので、予防につながる。免疫細胞としては末梢のリンパ球(T細胞、B細胞)、骨髄細胞、中枢神経系のグリア細胞(ミクログリア、アストロサイト)などが関与する。

【DMT例1】フィンゴリモドは再発寛解型MSに対する経口の再発予防薬である。フィンゴリモドはリンパ球がリンパ節・脾臓などのリンパ組織から出て行くのを抑える。体内を循環するリンパ球の数、中枢神経系に入っていくリンパ球の数も減り、MS再発が抑えられる。

【DMT例2】ナタリズマブはリンパ球(T細胞)の表面にあるインテグリンをブロックすることで、T細胞が中枢神経系に入るのを阻止する。

まとめると、DMTは再発予防や進行抑制が目的である。神経疾患のうち多発性硬化症(MS)を例に説明したが、アルツハイマー病などでも開発が進められている。今後、発症前に開始して発症予防することも視野に入る。